

国際学校図書館協会（IASL）とアジア太平洋地域

長倉美恵子

（元東京学芸大学教授）

The Contribution of International Association of School Librarianship (IASL) to Enhance the Library and Information Science for Asia and the Pacific

By Mieko NAGAKURA

(Professor, ret. of Tokyo Gakugei University)

要約

本稿は四項目に分け、国際学校図書館協会による図書館情報学への貢献を述べた。第一項では IASL の設立経緯、使命、事業及び年次研究大会について紹介すると共に、アジアで開催された研究大会テーマは学校図書館におけるデジタル化についてが多かったことを指摘した。第二項では東南アジア諸国の学校図書館事情に触れ、図書館の教育的効果が十分に認識されておらず、同時に図書室の狭さ、蔵書の貧弱さ、予算不足が課題で、さらなる図書館員育成の必要性が認められた。第三項では 1971 年以降 2006 まで日本会員が東アジア地域理事、また研究誌 *School Library Worldwide* の編集委員として、IASL の経営に貢献してきたことを述べた。アジア太平洋地域で開催の年次研究大会には渡航費や参加費面から、多数の日本会員が大会に参加し、研究発表を行ってきた。第 4 項に於いては IASL と LISSASPAC との比較を行った。両者の決定的差違は前者が「協会」で後者が「学会」であることだ。会費を納入すれば誰でも IASL 会員になれるが、LISSASPAC では図書館情報学での博士号を持つ者しか正会員にならない。IASL と LISSASPAC のいずれでも会費徴収額は会員の居住地の経済状況、つまり GNP に基づき決定されてる。注目すべきは IASL が個人正会員と同等の特典と選挙権がある退職者会費優遇制度を設けていることだ。IASL と LISSASPAC との比較及び IASL と日本との関わりから、地域限定の図書館情報学関連団体には経済的見地から明らかなメリットがあることがわかった。

Summary

This presentation consists of four sections. In the first section, the origin, the mission, the activities and the annual conference of IASL are introduced. The themes of the past conferences held in Asia are mostly referred to the digital devices in school librarianship. In the second, the situations of school library in South East Asian countries, e.g. Thailand, Malaysia, Indonesia, Cambodia, Vietnam and Laos are reported. The situations in South East Asia vary from country to country, but it is found that the roles and the effectiveness of library in educational process are not well recognized socially

and even at schools. Also, the shortages of library space, materials and budget are keen in many schools. The lack of professionally trained library staff requires the betterment of library school programs, focusing on the use of digital devices. In the third, the involvement to the IASL administration and the participation in its annual conferences by Japanese members are described in detail. Japanese members had contributed to the IASL administration as the regional director of East Asia from 1971 to 2006 and as an editorial member of the organ, *School Library Worldwide*. When the conferences were held in Asia and the Pacific, many Japanese members attended the conference workshops and meetings, and made the presentations at study sessions. This fact may due to the nearness to the conference venue from Japan. In the last section, the comparison between IASL and LISSASPAC was made from the viewpoints of their objects, the mission, the activities and the membership requirements with fees and dues. Both IASL and LISSASPAC are professional organizations in the field of library and information science. The vital difference is that the former is “association” and the latter is “society”. While IASL allows any one the full membership if the payment of dues is made up to the appropriate date, LISSASPAC gives the full individual membership only to the one who has Doctoral Degree in Library and Information Science and its equivalent. At both organizations, the amounts of their fees and dues are decided in consideration with the economic conditions of geographic zones or the GNP where the members reside. It is unique that IASL provides a special membership for the retirees at the reduced amounts of dues with the same privileges and voting rights as the individual/personal members. Through various experiences of Japanese IASL members in the past and the comparison between the stances of IASL and LISSASPAC, it became clear that a professional organization with the geographic area limitation has a definite merit from the economical point for participating in every activity of the organization, including the attendance to the conferences and workshops which make possible the face to face communication for its members.

1. アジア太平洋地域における IASL

国際学校図書館協会（International Association of School Librarianship：IASL）は「初等・中等学校の図書館サービスに関心のある人々の国際的話し合いの場」として、世界教職員団体総連合（WCOTP）を母体に 1971 年に結成された。年次大会開催、機関誌刊行、会員間の交流を主要事業としている¹⁾。日本は結成当初より参加しており、設立メンバーにも名を連ねている。また、1971 年から 2006 年まではアジア地域理事として、その運営にも貢献してきた。機関誌の編集委員にも刊行当初から指名されてきた。

毎夏、世界各地で開催される IASL 年次大会は、これまでアジア太平洋地域で 21 回開かれている。米国で 7 回、カナダとオーストラリアで各 3 回、マレーシアで 2 回、香港、台湾、シンガポール、インドネシア、ニュージーランド、日本が各々 1 回ずつである²⁾。アジアでは、

まだインド、タイ、ミャンマー、ヴェトナム、フィリピン、韓国などで開催されたことはなく、また会員数も少ない。但し韓国は IASL 年次大会と同様な趣旨の国際研究集会である児童青少年図書館サービス国際シンポジウム (International Symposium on Library Services for Children and Young Adults) を開催している³⁾。

さて、昨 2016 年 8 月 22 日から 26 日まで、東京お茶の水の明治大学キャンパスにおいて国際学校図書館協会 (IASL) の第 45 回年次大会が開催され、アジア太平洋地域のみならず、遠くアフリカ、中東、欧州の 30 カ国から約 300 名、国内からのスタッフや 1 日参加者を加えると約 400 名が参集した⁴⁾。この大会は 1986 年 8 月 24~29 日、東京で開催された第 52 回国際図書館連盟 (IFLA) 年次大会以来の我が国における図書館情報に関連した大規模な国際集会であった。丁度 30 年前の IFLA 大会のテーマは「21 世紀への図書館」(New Horizons of Librarianship towards the 21st Century) だったが⁵⁾、今回の ISAL 大会のテーマは「デジタル時代の学校図書館」(A School Library Built for the Digital Age) である。我々がかつて真剣に予測しようと努めた 21 世紀の図書館の在り方とはデジタル・デバイスを基幹とするものであったわけである。

21 世紀になってからアジアで開催された IASL 年次大会テーマは、欧米で開催の年次大会テーマと比べるとデジタル・サービスに関連したものが多い。例えば 2005 年の香港大会のテーマは「文明変革期における情報サービスのリーダーシップ」(Information Leadership in a Culture of Change) で、デジタル時代において学校図書館がいかに指導的役割を果たすべきかが討議された。2007 年の台北大会は、ずばりテーマを「電腦空間・デジタル世界・E ラーニング：図書館と学校の最先端化」(Cyberspace, D-Would, E-learning: Giving Libraries and Schools the Cutting Edge) とした。2013 年のインドネシア・バリ島大会は「学校図書館による学生生活スキルの質向上」(Enhancing Students' Life Skills through the School Library) をテーマに、学校図書館のデジタル・デバイスを利活用して学習活動を活発化させる方策が考察された⁶⁾。

このような傾向は、長い伝統を持つ児童図書館サービスが学校の中に次第に浸透していった学校図書館が生まれたという欧米にくらべ、アジアでは高度情報化時代になって学校教育がデジタル・デバイスに富む各学校内施設である図書館を近年になって急速に設置するようになったという、現代図書館の歴史的な域差によると思われる。そして、このような状況は高温多湿なアジア地域では極めて望ましいものであろう。つまり製紙技術や印刷術が高度な発達を遂げ、堅牢な図書が生産可能になってきているが、低価格で刊行部数も少ない児童書は、出版者にとって利益が少ない。さらに極めて小さい個々の学校にとって、高温多湿な環境で図書を保存に良好な状況に置くには経済的負担が過重になってしまう。空調を整備した図書室がなくとも、PC、I パッド、スマホなどで手軽に学習情報が豊富に提供できるデジタル・デバイスに富んだ環境の方が、むしろ望ましい。

2. アジア太平洋地域における学校図書館の現状

学校教育と緊密な関連のある学校図書館の在り方は、同じアジア太平洋地域でも国ごとに大きく異なっている。米国やカナダは周知の通り、地域のなかでは最も進歩した状況にある。勿論、同じ国内でも地域や地方、自治体によって大きな差があることを認めた上でのことである。しかし、社会の経済力が低下傾向にあり、かつトランプ政権下での米国の学校図書館は多少の陰りを帯びてきており、今やカナダの方が良好な状況にある。

東南アジアではタイが図書館界におけるリーダーシップを持っている。タイでは図書館が学校における教育の質向上を図るための基本的条件として、予算、施設、設備、職員養成の面から優遇されてきており、より多くの学校に図書館が設置され、魅力的でアカデミックな雰囲気施設の施設に改善され、様々なテクノロジーの導入や多様な活動が行われている。また、王室の影響力が強いタイでは、前国王の娘シリンドーン王女が図書館サービス振興に熱心で、国境警備警察局長管轄下の小学校に図書館を設置したり、援助を与えたりしている。南部の学校図書館は地域の高齢者への貸出サービスまでしている。但し、司書教諭は一般教師同様に授業や校務を担当しており、地方の小学校では司書教諭が無配置だったり、教師が図書コーナーや図書室を担当したりしているという。

タイの公共図書館は教育省学校外教育部（BMA）、バンコク市当局（BMA）、民間企業や民間団体など、多様な組織によって経営されている。バンコク市立図書館は7台の自動車文庫、図書館5館、16地域分館を通じて市民や児童生徒にサービスしている。特にショッピングセンター内にあるタイ知識公園生活図書館（Living Library at Thai Knowledge Park）は世界的にも有名である。タイでは一般的に公共図書館と学校図書館との協力は緊密で、職員相互間の研修やリソースシェアリングが活発に行われている⁷⁾。

マレーシアでは情報化時代における熟練された人材育成を重点に、知的、身体的、かつ情緒面や精神面で健全な多才な人間形成を目的とし、スマートスクール制（Malaysian Smart School: MSS）が導入され、これを支援するために学校リソースセンター（SRC）が整備されている。MSSとはマルチメディア技術の採用、インターネット利用により、学習をよりダイナミックに、インターアクティブ（相互作用的）にする方策である。ほとんどの学校に設置されているSRCの資料は、教育省から支給されたもの、学校で購入したもの、その他の団体から寄贈されたもので構成されている。そして、情報リテラシーはカリキュラム学習の成果に組み込まれ、評価対象の一つとされている⁸⁾。

インドネシアでは学校図書館は設置されているものの、多くの学校で図書館や図書館員が質の高い指導・学習過程において重要な役割を果たすと考えられていない。教師が直接に児童・生徒に読書法、特定トピックのクリッピング作成、インターネット、新聞、ラジオ、テレビ、辞書類、地方政府、図書館、図書、電子ジャーナル、実習、見学など多様な情報源の利用、収集情報に基づいての発表方法などを指導しており、学校図書館や図書館員は中心的役割を果たすことができないでいるという⁹⁾。

カンボジアでは学校図書館の管理は主に教師が担当している。熟達した図書館員の不在、

PC やインターネットとの接続の欠如、また電源の不在等の状況が一般的だが、最近では学校図書館を設置する新しい動きが始まっている。2003 年以降、教育・青少年・スポーツ省は NGO（非政府団体）や IO（国際団体）の協力を得て学校図書館についてのワークショップや会合を開催し、学校図書館は生徒にとってばかりではなく、地域の人々にとっても知識や情報の取得、学習意欲の喚起、想像力や思考力の向上、言語力のアップ、くつろぎの確保などに効果があるとの啓蒙を行ってきた。この結果、全般的な学校図書館への社会的認識が深まったという。民間の国際団体シャンティ・ボランティア協会（Shanti Volunteer Association）も教育・青少年・スポーツ省の学校図書館を設置する運動に協力をしてる¹⁰⁾。

ヴェトナムでは学校図書館予算は増加しているものの、施設費や資料購入費を賄うには不十分だといわれている。しかしながら教育の発展に伴って学校図書館のサービスや活動は進展、拡大した。館内閲覧に加えて館外貸出も行われるようになり、生徒によるブックトーク・コンテストの実施や、隔年ごとの教育・訓練省による「優秀学校図書館員」顕彰が行われている。一方、依然として狭い読書室や書庫、貧弱な設備、低レベルの蔵書管理、熟達した図書館人材の不足、予算不足、図書館への関心の低さなどの課題は解決していないという¹¹⁾。

ラオス人民共和国政府は、その国家政策において「全ての中等及び初等学校は児童生徒や教師が自己学習のために利用する建物または部屋を整備し、こうした施設は最新の資料を入手しておかねばならない」と述べている。しかしながら、学校図書館設置数は少なく（2005 年の設置率 2.4%）、補助読書材は極めて少数で、教科書すら全児童に支給出来ていない状況である¹²⁾。

以上、東南アジアを中心に、各国の学校図書館の状況を述べてきたが、日本については IASL と関連付けながら、その状況に触れてみる。

3. IASL と日本との関わり

第 1 回の IASL 年次大会はロンドンで 1972 年 7 月 29 日から 31 日までの 3 日間開催され、日本から渡辺茂男（当時慶応義塾大学図書館学科教授）と赤星隆子（筑波大学図書館学系名誉教授）が参加した。この会の参加者には設立資金への拠金が促され、設立メンバー会員（Chartered member）と認定された。

第 2 回は 1973 年 7 月 29 日～31 日、ケニアのナイロビ市で開催され、赤星隆子が参加した。設立メンバー会員である彼女はアジア地域理事に指名された。地域理事の任期は 3 年で 1 回の再選が許される。そして、地域理事には年次大会時に併行して開催される理事会へのできる限りの出席が求められた。

第 3 回は 1974 年 7 月 27 日～30 日、シンガポールのアポロホテルで開催された。赤星理事の尽力と開催地が比較的日本に近かったため、主に首都圏の大学で司書・司書教諭の課程を担当する教員や司書教諭達 11 名が参加している。赤星理事の他、今まど子、古賀節子、小山郁子、高橋和子、筒井福子、渡辺茂男等である。

第 4 回は 1975 年 7 月 27 日～29 日、ベルリンで開催され、9 名が参加した。この会には全国

学校図書館協議会の芦谷清が参加したため、全国的に仙台の宮城県立第三女子高、京都の同志社中学、広島や浜松の高校司書教諭達が参加している。

第5回は1976年8月1日～3日に米国のアナポリス市で開催され、日本からは6名が参加した。全国学校図書館協議会参事で都立高校専任司書教諭の甲斐清を初め、同じく都立高校専任司書教諭山崎慶子、武蔵野市立境南小学校教諭学校図書館主任山田節子など、現役の司書教諭達である。丁度、全米図書館大会（ALA）がシアトルで開催されたため、IASLの日本人参加者はALAに参加した米国の参加者と共にバスに乗り、IASL会長 Jean Lowrie 博士をリーダーに西海岸から東海岸まで大陸横断旅行をした。全員が車中で合唱をしたり、ストーリーテリング、隠し芸などをしたりしながら、日米の児童文化交流を満喫したという。

第6回は1977年7月28～8月2日にナイジェリアのイバダン大学で開催された。長倉美恵子の研究発表が採用されたが、アフリカまでの渡航費は安い航空便を利用しても50万円余が掛かり、当時としては個人には過重負担であった。発表者参加費としてIASLから150ドル（約5万円）の助成が提示されたものの、長倉は参加をあきらめた。

以後、1978年の第7回メルボルン大会、1978年の第8回デンマーク・ミデルファスト大会に日本人会員は複数参加したものの研究発表者はいなかった。

当時国立教育研究所員だった長倉は、国際交流基金にIASL年次大会への渡航費を毎年申請していたが、ようやく1980年7月14日～17日にヴェネズエラのガイアナ市で開催の第9回大会への渡航費が全額支給された。日本の国立研究機関や国立大学において海外渡航費の支給は一般に順番制であり、例えば国際会議での研究発表が採用されたり、国際団体の役員を勤めたりしていても、毎年継続的に支給されることは稀である。だが、こうした場合、私立大学では全額ではなくとも、渡航費の一部が支給されることが多い。国際研究団体では役員であっても継続的に役員会に出席しなければ、直接に発言権を行使して団体内での権限や影響力を維持することは困難である。これが日本の抱える一つの課題である。

赤星隆子理事は退任後、IASL研究誌 *School Libraries Worldwide* の編集委員に任命され、彼女の推薦により長倉美恵子がアジア地域理事に選任された。1981年から1987年まで長倉が2期6年間理事を勤めた後、1984年に室伏武亜細亜大学教授がアジア地域理事を引き継いだ。この1984年には第13回年次大会がハワイのホノルルで開催され、日本からは7名の会員とその家族等が参加し、兵庫県立尼崎高校専任司書教諭大森光子と長倉が研究発表を行った。

1986年のIFLA東京大会開催以降、学校図書館界でも海外への関心が高まり、1996年には日本のIASL会員数は35名となり、国別会員数では米国、カナダ、オーストラリアに次いで世界第4位となった¹³⁾。

さて、室伏教授は理事を2期6年間勤め、1987年から再び長倉が地域理事になった。この頃、IASLはアジアからの参加国が増えたので、理事選出基盤となるアジア地域をインドや東南アジア諸国を含む「アジア」(Asia)と日本や台湾を含めた「東アジア」(East Asia)とに二分した。

室伏理事は在任中、IASLに個人的に2,000米ドルを寄付され、室伏武研究奨励賞 (Takeshi

Murofushi Research Award) が創設された。これは毎年、応募してくるユニークな学校図書館研究 1 件を理事会が選んで 500 米ドルの研究費を授与するというもので、IASL における最初の授賞基金 (Award Fund) である。当初の室伏理事からの寄付金が無くなった現在でも、この基金は世界中の IASL 会員からの寄付によって持続されている¹⁴⁾。

1999 年、2 期 6 年の任期を終了した長倉の推薦によって須永和之 (國學院大學教授) が東アジア理事に選任され、2005 年まで 2 期 6 年勤めた¹⁵⁾。

既にふれていることだが、IASL では第 2 回シンガポール大会や第 13 回ホノルル大会のように年次大会の開催地が比較的日本から近いと、日本からの参加者は格段に多くなる。この意味で全世界ではなく地域限定の国際研究団体の存在価値は極めて高いといえるのではないだろうか。

4. LISSASPAC と IASL

ここで LISSASPAC (アジア太平洋図書館情報学会、Library and Information Science Society for Asia and the Pacific) と IASL との比較を試みてみたい。

まず LISSASPAC は Society (学会) で、IASL は Association (協会) であることだ。このスタンスの差違は、特に設立目的や加入資格において明確である。LISSASPAC は設立目的に「図書館情報学や専門職教育及び養成の改善、個人的関係と協力に重点を置く図書館情報関連領域の研究者間の協力と協働の醸成」¹⁶⁾を掲げているが、IASL は「学校図書館の教育効果促進に関心のある人々の国際的な話し合いの場」¹⁷⁾を提供することを使命にしている。前者は入会に博士または同等の資格と会員による推薦を加入前提条件にしているが¹⁸⁾、後者は入会に際し審査はなく、趣旨に賛同する誰でもが会費を支払えば加入できる¹⁹⁾。

一方、会の経営や組織については、研究者の個人的関係と協力に重点を置く LISSASPAC では韓国、インド、米国、イラン、中国、シンガポール、日本等の国別支部を結成しているが、IASL では地域別研究会議 (Regional conference) が執行部 (Executive Board) による審議を経た上で開催が許可されることはあるが、一切の支部結成は禁止されている。こうした一局集中の組織は、文化や伝統、社会情勢や状況の異なる多数の国からの多様なレベルの会員により構成される IASL のスムーズな経営にとっては必然的な解決方法であるのだろう。但し執行部メンバーの任期は 3 年で、再選は許されてない。

LISSASPAC は二年前の 2015 年に結成され、随時、アジアで図書館情報関連機関や団体との連携で研究大会 (conference) を開催してきているが、IASL は 1971 年以降、これまで毎年 7~9 月の間に 45 回の年次大会を世界各地で開催してきた。IASL の場合、インターネットやメールが普及されていなかった頃には、定期的な年次大会開催は各地域あるいは各国、各会員の意向を執行部に伝達する唯一の機会であったからである。現在、IASL には iasl-online という会員ネットワークが確立されており、かつては冊子で刊行されていた機関誌 *IASL Newsletter* や研究誌 *School Libraries Worldwide*、会員間の通信も全てデジタル・デバイスで行われている。

デジタル・デバイスによる会員間のコミュニケーションが可能であったとしても、やはり対人コミュニケーションの機会である定期的会合の必要性が減ずることはない。その意味で LISSASPAC、IASL のいずれにとっても研究大会の開催とそれへの出席は不可欠な条件である。LISSASPAC はアジア太平洋地域に限定されているので、比較的に渡航費等の負担が少ない。これは地域限定国際研究団体の大きなメリットである。これに対し IASL は会員間の公平を維持するために年次大会を世界各地で順番に開催するが、開催地が自国より遠隔地である場合は、意に反しつつも渡航費等の過重負担のために参加を断念せざるを得ないことがある。そこで、IASL は「指導者開発助成」(Leadership Development Grant) という制度を設けた。これは初代 IASL 会長の Jean Lowrie 博士、IASL 事務局長をされたカナダの出版者 Ken Haycock 氏、昨夏の東京大会開催時の IASL 会長 Diljit Singh 博士からの寄付金を基に創設された基金で、IASL 年次大会にこれまで参加したことのない開発途上国の参加者に 1000 米ドルを限度とした渡航費を援助するものである²⁰⁾。

不当な権力の介入を排除するため、研究団体は組織外からの献金に頼らず、会員からの会費や寄付を主要な財源としなければならない。ところが図書館情報関係者の俸給は他のプロフェッションに比べて優遇されてはいない。そこで LISSASPAC も IASL も会員の資格や居住地による経済的格差に配慮する様々な会費制を採用している。原則として研究者を加入者とする LISSASPAC は博士号を有する者を正会員 (Regular member) とし、修士号を有する者を準会員 (Associate member) している。準会員の会費は低い正会員も準会員も同様の権利が与えられている。しかしながら、後者には選挙権が無い²¹⁾。他方、入会資格を問わない IASL は正会員 (Personal membership)、学生会員 (Student membership)、退職者会員 (Retiree membership) を設けており、学生会員のみには選挙権が無いだけで、三者は同様の権利を与えられている。退職者会員費は学生会員費と同額で正会員費より低くなっている。ちなみに退職者会員とは 65 歳以上で、かつ正規雇用 (full-time employment) になっていない者である²²⁾。

会員の居住地による経済的格差に配慮して LISSASPAC も IASL も国別会費区分制を定めている。区分設定は両者とも国民総生産 (GNP) に基づいているが、前者は高国民総生産国 (Higher GNP Countries) と低国民総生産国 (Low GNP Countries) の二区分で²³⁾、後者は世界 226 カ国を A、B、C のゾーン (Zone) に三分している。特に後者では具体的に A、B、C 各ゾーン毎の国名を表示している²⁴⁾。ちなみに LISSASPAC 支部がされているアジア太平洋地域の国で、韓国、シンガポール、米国、日本が A ゾーンで、インド、中国、イランは C ゾーンである。一見、会費徴収区分を克明に国名で表示することは公正に思われるが、GNP がめまぐるしく変動する状況にあっては、むしろ LISSASPAC のように会費徴収区分を当該の執行部に委ねる方が妥当かもしれない。

注 (サイトの確認最終日は特に記すもの以外 2017 年 7 月 10 日)

1) 長倉美恵子「国際化へと始動した日本の学校図書館－国際学校図書館協会とその東京大会」『カレントアウェアネス』No.330, 2016. 12.20, p.8-9.

2) 長倉美恵子「IASL と日本の学校図書館界」『学校図書館』No.786, 2016, p.19.

- 3) 長倉美恵子「世界を結ぶ読書：第6回児童・青少年図書館サービス国際シンポジウム（韓国）」『学校図書館学研究』V.15, 2013, p.115-127.
- 4) 長倉美恵子, 前掲1), p.8.
- 5) 編集委員会「まえがき」『図書館界』38(5), 1987. 1, p.iv-v.
- 6) IASL Past and Future Conference Proceedings.
<http://www.iasl-online.org/meetings/info.html>
- 7) サリダード・スリトン著 長倉美恵子訳「特別講演 タイと東南アジアの学校図書館」『学校図書館学研究』V.10, 2008. 3, p.92-94.
- 8) 同上, p.96-97.
- 9) 同上, p.99-100.
- 10) 同上, p.97-99.
- 11) 同上, p.101-102.
- 12) 同上, p.100-101.
- 13) International Association of School Librarianship. *Worldwide Directory for Board Members: A List of Personal, Institutional and Association Members*, June 1996, Seattle, 1996, 103 p.
- 14) 長倉美恵子, 前掲2), p.28.
- 15) 須永和之「IASL 研究大会から見た世界の学校図書館」『学校図書館』No.786, 2016, p.28.
- 16) Library and Information Science Society for Asia and the Pacific. Objective.
<http://www.lisasspac.org/about.html>
- 17) IASL Vision, Mission, and Objectives
<http://www.iasl-online.org/about/organization/vision.html>
- 18) Library and Information Science Society for Asia and the Pacific. Categories.
<http://www.lisasspac.org/lisasspac-membership.html>
- 19) 長倉美恵子, 前掲1) p.8
- 20) IASL Awards、Jean Lowrie Leadership Development Grant.
<http://www.iasl-online.org/awards/lowrie.html>
IASL Awards、Ken Haycock Leadership Development Grant.
<http://www.iasl-online.org/awards/haycock.html>
IASL Awards、Diljit Leadership Development Grant.
<http://www.iasl-online.org/awards/singh.html> (参照：2017. 7. 16)
- 21) Library and Information Science Society for Asia and the Pacific. 前掲18)
- 22) IASL Categories. and Benefits
<http://www.iasl-online.org/member-info.html>
- 23) Library and Information Science Society for Asia and the Pacific. 前掲18)
- 24) IASL Dues IASL Geographic Zones
<http://www.iasl-online.org/member-info.html>